

南部フォッサマグナ地域新生界地層名辞典

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金子, 剛, 石黒, 均, 田村, 淳一, 新妻, 信明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000235

南部フォッサマグナ地域新生界地層名辞典

金子 剛*・石黒 均[†]・田村淳一*・新妻信明*

Lexicon of Stratigraphic Names of Cenozoic Erathem in the
Southern Fossa-Magna Region, Central Japan

Tsuyoshi KANEKO*, Hitoshi ISHIGURO,[†] Junichi TAMURA*,
and Nobuaki NIITSUMA*

This lexicon has been prepared in order to facilitate further geoscientific studies of the Southern Fossa-Magna Region, Central Japan. It covers almost all the stratigraphic names used so far in stratigraphic works on the Cenozoic Erathem in this region.

Literatures used for collation of the stratigraphic names in this lexicon attain to 520 papers from 1885 to 1983, in which some unpublished data of Shizuoka, Tohoku and Yokohama Universities are included.

はじめに

富士川、御坂山地、丹沢山地は、いわゆる南部フォッサマグナ地域に位置している。この地域に分布する地層の大部分は、新第三紀以後に堆積した厚い火山砕屑岩、堆積岩からなる。これらの地層の形成、構造発達史は、近隣の伊豆半島、房総半島等の地域と常に密接な関係を持っている。そして、新第三紀以後の日本列島の形成発達史を考える上で、これらの地域のそれぞれの地史および各年代における相互の関係をj知る事が基本的に重要であると考えられている。

これらの地域の地質学的研究は、古く NAUMANN (1885) 以来 100 年近くにわたって行なわれ、多くの地球科学者の注目を集めて来た。しかし、地形が急峻であり交通の便も良くない事等から調査が困難であった。本格的な調査が集中的に行なわれるようになったのは、富士川南部では 1940 年代、富士川中部では 1960 年代、富士川北部御坂山地では 1950 年代、巨摩山地では 1960 年代後半、三ツ峠山東方では

1930 年代、丹沢山地では 1950 年代後半になってからの事で、現在でもなお未調査の地域が残されている。これらの地域は糸魚川—静岡構造線をはじめとする多くの断層によって鱗片状に区切られている。これまでの基本的な層序の組み立ては、この鱗片状に区分された各地域ごとになされている。しかし、研究者によっては、地域が異なっても岩相の一致がみられる場合には同一の地層として 1 つの地層名を与えたり、1 つの地層であっても研究者が異なれば異なる地層名が与えられていたりしている。また、同一の地層名であっても定義が異なる場合がある。

このような状況では、これらの地域が地球科学的に興味があり重要であっても、研究者が互いに共通の認識の上に立って議論することは困難であり今後の研究の発展の障害となる事が予想される。

このため筆者らは、富士川、御坂山地、丹沢山地の地球科学的検討を行なう際に、まずその層序を整理し、各々の地層を 1 つの層序表の中にまとめ、ひ

1983 年 1 月 24 日受理

* 静岡大学理学部地球科学教室 Institute of Geosciences, School of Science, Shizuoka University, Shizuoka 422, Japan.

[†] 現所属 present address: 環境アセスメントセンター Environmental Assessment Center, Seikancho 13-12, Shizuoka 420, Japan.

いては地質年代尺度の中に位置づける事が必要であると考え、この辞典を作成した。

本辞典においては、まず断層によって鱗片状に区切られた各地域を区分することを行なった。区分された地域は、足柄、丹沢南部、丹沢東縁部、丹沢東部、丹沢中部、丹沢北部、御坂山地東部、河口湖、御坂山地西部、本栖湖、六郷、巨摩山地、鯨沢、曙・下部、鷹取山、小縄、天子岳、万沢・寄畑、篠井山、戸栗川上流、富士川下流、浜石岳、興津北方、清水北方、静岡北方、有度丘陵、高草山の各地域であり、それらを第2図に示した。

次にこれらの各地域において、これまで行なわれた層序学的研究に関する論文を検討した上で最も妥当であると考えられる層序を模式層序として採用し、その地域内のその他の地層および地層名はすべて模式層序に対比または対応させるようにし、各々の地域内での層序関係を整理した。各地域相互の模式層序の関係は表1～5に示した。また、各地域における模式層序とこれまで各研究者が用いてきた層序との関係は表6～38に示した。なお、富士川・御坂山地全体での模式層序としては下部・曙地域のものを、丹沢山地全体での模式層序としては丹沢東部地域のもので代表させた。以上のような整理法により、本辞典においては富士川、御坂山地、丹沢山地の全ての新生界は表1～5に用いられている各地域の模式層序を構成する地層によって区分され、その模式層序を構成しているそれぞれの地層の項目の内容によってその地域の地質の概要を知ることができるように配慮した。

本辞典に収録した地層は、地層名、地層名の命名者およびその論文の発行年、【模式地】、【層序関係】、【分布】、【層序】、【岩相・層序・構造】、【年代】、【対比】、【備考】、【文献】の順に記載されている。

見出し語としては地層名をヘボン式ローマ字で表示したものを用い、アルファベット順に配列した。日本文の論文、英文でも地層名の日本語訳が付記してあるものについては、地層名は見出し語のローマ字および漢字によって表示した。模式層序に用いる地層名は International stratigraphic guide (1976) に従い、地層名、層群名には2名式命名法を用い、部層名には3名式命名法を用いた。地層名の英名化は、模式層序に関しては「層」の英訳として Forma-

tion を、「部層」の英訳として Member を、「層群」の英訳として Group を与えた。岩石名を地層名に用いているものは、その英訳を用いた。また、模式層序以外のものについては、原論文中の英訳にかかわらず「層」、「累層」の訳として Formation を、「部層」の訳として Member を、「層群」の訳として Group を与えた。英文の論文で上記にあてはまらない地層名がついている場合は、英名をそのまま見出し語とした。

地名の読み方は、NHK 静岡放送局編「静岡県地名辞典」、NHK 甲府放送局編「山梨県の地名」にできる限り従った。両者に記載のない地名については、各市町村役場に問い合わせた。原記載が「地名辞典」の読み方と異なる場合には、原則として層名の読み方のみを変更し、地層区分はそのまま用いた。ただし、原記載に用いられている名称も別に項目を設け、改訂後の項目を引けるようにした。地名辞典と読み方が異なる場合でも30年近くにわたり改訂されておらず、今回改訂を行なわない方が妥当であると考えられる場合は、原記載に従った。

【模式地】は、模式層序の場合、命名者あるいは再定義者によって指定された地域を記載し、指定のない場合は層名命名に用いられた地名を模式地として記載した。模式層序に用いた層群は、模式構成層を記載した。模式層序以外の場合、原論文に模式地の指定がある場合のみ記した。「累層」がいくつかの層に細分されている場合には、その構成層名を記した。

【層序関係】は、その地層の上位層および下位層との層序関係を記した。模式層序以外のものについては、命名者の層序関係に関する見解を記した。なお、再定義、改訂が行なわれた場合には、それを備考の欄に記した。

【年代】は、国際対比に用いられる浮遊性微化石による化石層序学的資料を参考にして模式層序に用いられている地層の年代を決め、その年代に従って模式層序以外の地層の年代も記した。

【対比】は、富士川河谷および御坂山地に分布する地層は曙・下部地域の地層・層群と、丹沢山地に分布する地層は丹沢東部地域の地層・層群との対比を示した。曙・下部地域の地層・層群と丹沢東部地

域の地層・層群は、相互の対比を示した。富士川下流地域は有度丘陵地域との対比を示した。

【文献】は、その層名を扱っている文献を年代順に記した。文献の表示に際しては著者の姓名をともに記し、発表年を括弧内に付した。

本辞典末尾の文献リストには、これまで公表された富士川河谷、御坂山地、丹沢山地の地質に関するすべての文献、および地形、鉱山、温泉、地球物理、古生物、岩石、鉱物等に関する文献のうち、地質と密接な関係を持つものをできるだけ収録した。従って、文献リストの中には本辞典に引用されていないものも含まれている。また、本辞典においてしばしば引用される論文中の地質図の範囲は、図3～7に示してある。

これまで公表された文献以外にもこの地域の地質を知る上に重要な未公表の資料もできるだけ収録した。それらは静岡大学地球科学教室、東北大学地質学古生物学教室、横浜国立大学地学教室の卒業論文、および修士論文である。東北大学の未公表資料の大部分は北村信教授の指導された課題研究の成果であり、横浜国立大学の未公表資料の大部分は見上敬三教授の指導された課題研究の成果である。

本辞典の作成にあたり、東北大学理学部地質学古生物学教室の北村 信教授、中川久夫助教授、横浜国立大学教育学部地学教室の見上敬三教授、東京大学地震研究所の松田時彦教授、静岡大学理学部地球科学教室の長沢敬之助教授、北里 洋博士には有益な御意見をいただくとともに、原稿の校閲をしていただいた。山梨県庁土地水対策課の和田 勉氏には文献について御教示いただくとともに入手のための便宜を計っていただいた。明治コンサルタントの太田英将、京都大学理学部地質学鉱物学教室の武藤鉄司、東京大学地震研究所の小山真人の各氏には本辞典作成を企画した段階から御協力いただいた。特に文献の収集に関しては太田・武藤の両氏に負うところが大きい。東京大学理学部地質学教室の近藤康生、静岡大学理学部地球科学教室の秋山文孝、石井嘉司、石川 力、伊藤良三、鈴木英典、奈良康介、村上慎二、山本哲之、兵頭 浩、静岡大学スタンダードハーモニージャズオーケストラの菊池和弘、北村俊也、永井香織、長沢康弘、橋本美史、牧 浩司、和久田学の各氏には本稿作成にあたり協力いただいた。これらの方々に感謝の意を表す。